

## 新たな戦争態勢への移行か

# 日米共同作戦から見た 「陸上総隊」創設の狙い

成澤 宗男

この3月、「陸上自衛隊の歴史始まって以来の組織変革」とされる陸上総隊が新設される。それは同時に、きな臭い自衛隊の海外戦争態勢への移行でもあるのだ。

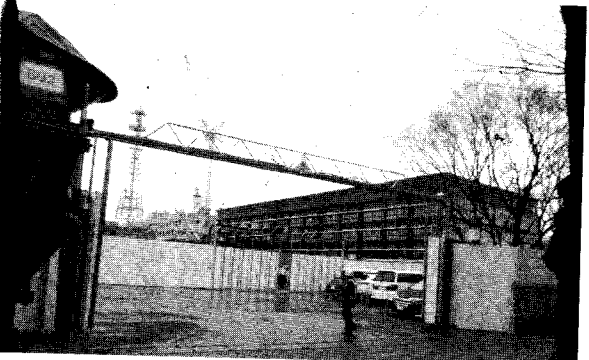
かつて一部が川越街道と呼ばれた国道254号で東京から埼玉方面に向かうと、やがて左手に金網に囲まれた、陸上自衛隊東部方面隊の朝霞駐屯地の広大な敷地が見えてくる。

国道沿いに「朝霞門」と呼ばれる大きな入口があり、駐屯地の検問所とは別に、そこから陸自最大の広報施設「りつくんランド」に誰でも自由に入場できる。内部には戦車や大砲、軍用ヘリコプター等が展示されているほか、射撃シミュレーターや3Dの映像が楽しめるシアターも設置され、ちよっとした娯楽施設のように日曜日には家族連れなどで賑わう。

だが、「朝霞門」は駐屯地の裏門で、正門はその正反対のはるか奥まった場所に位置する「大泉門」だ。総監部の建物が近くにあるが、この門から毎日、日曜日も休みなく多数のトラックやコンクリートミキサー車が突貫工事のために出

入りしている光景を、「りつくんランド」の訪問者たちが目にする機会は稀に違いない。

来る3月27日、「陸上自衛隊創隊以来の組織変革」と呼ばれる陸上総隊という新組織が誕生するが、その本部庁舎を建設する工事が急がれているのだ。建物の全容は機密のベールで覆われているが、本誌が入手した図面（左頁）によれば



陸上総隊の庁舎建設のため、突貫工事が続いて車輛の出入りが頻繁な、陸上自衛隊東部方面隊朝霞駐屯地の「大泉門」（東京都練馬区）。(写真提供/坂本茂)

ば地上5階の庁舎が深さ約21メートルもの巨大地下施設（今年12月完成予定）と結ばれ、これまた巨大な換気塔も併設されている。

### 「島嶼防衛」のウツ

この陸上総隊が浮上するきっかけとなったのは、第2次安倍晋三内閣が誕生した翌2013年12月、閣議決定された「防衛計画の大綱（25大綱）」において、「統合機動防衛力」の構築が前面に打ち出されたこと。

そこでは、中国海軍の動きが活発化したとされる沖縄の南西諸島を念頭に「島嶼部に対する攻撃を始めたとする各種事態に即応し、実効的かつ機動的に対処し得る」自衛隊の役割が強調された。そして陸自が「（島への）侵略を阻止・排除し……侵攻があった場合には、これを奪回する」ために与えられた任務は、以下の3点だった。

①石垣島や宮古島、与那国島と

いった島々への新たな部隊配置②「日本版海兵隊」と呼ばれる西部方面普通科連隊（長崎県佐世保市相浦駐屯地）を基幹部隊にした、「島嶼奪還」のための「水陸機動団」の新設③陸自が現在保有する九個師団・六個旅団中、三個師団・四個旅団の「機動師団・機動旅団」への改編……。このうち、17年5月に成立した「防衛省設置法等の一部を改正する法律」によって正式に発足した陸上総隊が直接関係するのは、特に③だろう。

陸自はこれまで全国を北部、東北、東部、中部、西部の五つの方面隊に区分して、各方面隊を統括・指揮する部隊を設置してこなってきた。各方面隊は独立した指揮権を有し、防衛大臣が統合幕僚長を通じて陸自を指揮する場合、五つの方面隊にそれぞれ命令を出す必要があった。

だが今後は、全国から迅速な機動展開が可能という「機動師団・機動旅団」を編成して「島嶼防衛」のために南西諸島に投入することになり、各方面隊を二元的に「統合」し、指揮下に置いたための陸上総隊が新編成された。

なお、五つの方面隊と並列し、防衛大臣直轄で、陸自の第1空挺団や第1ヘリコプター団、特殊作戦群等で構成される中央即応集団（神奈川県座間駐屯地）が200